学苑　昭和女子大学紀要　No. 970　50～66（2022・7）

〔研究ノート〕

クララ・シューマンの楽譜編集と「教育版」について

―「クララ・シューマン版」をめぐる諸問題―

大　澤　里　紗

Clara Schumann's Editing of Musical Score and "Instruktiv Ausgabe"

―Issues concerning the "Clara Schumann- Ausgabe"―

OSAWA Risa

This study discusses the problems surrounding Clara Schumann's editing of musical scores for piano by Robert Schumann. It examines "Robert Schumann's Complete Works (*Robert Schumanns Werke*)" and "Instructive Edition (*Instruktiv Ausgabe*)", both edited by Clara Schumann and the "Clara Schumann-Edition (*Clara Schumann- Ausgabe*)" in chronological order, and compares them with the reprinted "Instructive Edition". In this paper, "Abegg Variations Op. 1" is the subject of analysis. The contents of Clara's revision of this work, her interpretation for performance, and the extent of her intervention are considered. Summarizing the history and reception of the "Instructive Edition" makes it clear that Clara's "Instructive Edition" was published with a different purpose from other instructive editions that ware popular in the 19th century. It is necessary to continue comparative research of the reprinted "educational editions" and also to reevaluate Clara's editing of Robert's scores in order to examine how pianists, understanding that Clara's editing is based on her deep knowledge of her husband's work, should evaluate and use this edition.

Key words: Clara Schumann（クララ・シューマン）, *Robert Schumann*（ロベルト・シューマン）, *Piano Education*（ピアノ教育）, *Edition*（エディション）

はじめに

本稿はロベルト・シューマン Robert Schumann（1810-1856）の妻であるクララ・シューマン Clara Schumann（1819-1896）が行った楽譜編集の歴史を整理し，クララが出版した「教育版 *Instruktiv Ausgabe*」の実態について検討したものである。

クララは夫の死後，シューマン作品の楽譜編集を二度に分けて行なっている[1]。1つはヨハネス・ブラームス Johannes Brahms（1833-1897）と共に編集した「（旧）全集）」[2]，もう1つは同時期にクララが単独でピアノ作品のみを編集した「教育版」である[3]。これまで「教育版」についてはクララによって運指，ペダリング，メトロノーム指示，強弱記号などが改訂された楽譜と知られつつも「教育版」の販売が長年途絶えていたため，簡単に演奏者が入手できる状況ではなかった。2017年には「教育版」の復刻版がドール社（Dohr）から出版されたことで初めて入手可能となったが，それでも尚，その存

在自体は一般的に知られておらず演奏者が手にする機会は少ない。

クララが編集した楽譜は上記の2つの版以外に「クララ・シューマン版 *Clara Schumann-Ausgabe*」と呼称される版もあり，それは一般的にブライトコプフ・ウント・ヘルテル社（Breitkopf & Härtel, 以下，ブライトコプフ社と略記）から出版されている『ロベルト・シューマン作品集 *Robert Schumann Sämtliche Klavierwerke*』を指す。しかし，この版はクララの死後，ピアニストのヴィルヘルム・ケンプ Wilhelm Kempff（1895–1991）がクララの「教育版」を再校訂したものである。このように，クララが直接的あるいは間接的に関与した楽譜は複数存在するが，この複雑な出版史や各版の実態についてはあまり知られていない。さらに，これらは全てブライトコプフ社から出版されているため「クララ・シューマン版」とはどのような版なのかについて，正しく区別されず混乱が生じていると考えられる。そこで，本稿では「クララ・シューマン版」を取り巻く煩雑した状況を整理し，《アベッグ変奏曲》作品1を研究対象に復刻版「教育版」の内容について考察することを目的とする。

1. クララ・シューマンの楽譜編集と複数の「クララ・シューマン版」

先述した通り，クララは「（旧）全集）」，「教育版」，「クララ・シューマン版（クララ＝ケンプ校訂版）」の全てにおいて，直接的または間接的に編集に関わっている。まず，クララが編集したそれぞれの楽譜の出版経緯を時系列に概観し，その上で「教育版」とは何を指すのか先行研究をもとに整理する。

(1)（旧）全集

シューマンの死後，クララはブラームスとともにシューマンの作品全集の出版に取り掛かる。全14シリーズの『ロベルト・シューマン作品全集』はブライトコプフ社から1879年から1893年にかけて出版された。この版は，「（旧）全集」とされながら，クララとブラームスは晩年の作品の《ヴァイオリン協奏曲　ニ短調》WoO 1や《ヴァイオリン・ソナタ第3番》WoO 2などをシューマンの持病（精神病）が作品に影響していると判断し意図的に排除している。基本的には初版をもとに編集されているが，校訂報告は一切付けられておらず，クララとブラームスがどのように編集したのかが不明である（Beiche 2015, 492）。「（旧）全集」は1886年の終わりまでにほとんどの作品が出版され，1887年には出版社が版権を取得していなかった作品の出版，1891年には《交響曲第4番》作品120の「初稿」，1893年には補足の巻が続いて出版された。

(2) 教育版

一方，ピアノ作品のみを編集した「教育版」は出版社側の要望で準備が始まった。1880年8月4日のブライトコプフ社との手紙には，出版社が運指の追加と表記法の変更を提案し，クララは「教育版」に興味を示し返答している（Beiche 2015, 495）。「（旧）全集」はブラームスと共同で編集していたが，1883年にクララは単独で「教育版」の編集に着手し，「全集版」と交互で編集を進めた（Ed. Breitkopf & Härtel 2018, IV）。同時期に「教育版」を出版した背景については，1886年に著作権保護期間の終了が近づく中で，他の編集者に先を越されないようにするための事前の駆け引きだったという見解や（Ed. Breitkopf & Härtel 2018, IV），ハンス・フォン・ビューロー Hans von Bülow（1830–1894）にシューマン作品の「教育版」を出版されることを防ぐためとの見解がある（Beiche 2015, 496）。つまり，1886年以降になると，当時の著作権期間（死後30年）が終了し，他の出版社に先を超される可能性があった

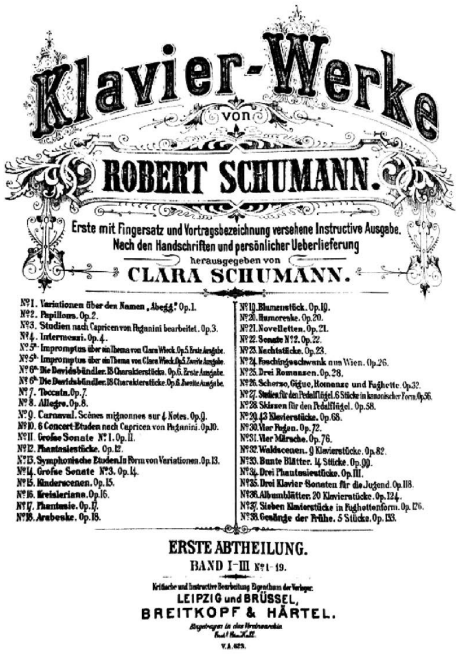
ため，クララは「(旧) 全集」の編集を中断して「教育版」の出版に移行したのである。この出版の背景を考えると，第三者によってシューマンの作品を誤った解釈で広めたくないという意識が大きく働いたことが想像できる。クララの存在がシューマンの作曲活動の源となり多くの作品が誕生した。そしてそれらを最も演奏していたのはクララであり，また作曲家の一番近くで演奏していたのもクララであったことを考えると，クララは自分の演奏解釈に自負があったに違いない。

また，メトロノーム記号の問題は「教育版」の出版を後押しした事案であろう。最初に「(旧) 全集」を出版するにあたり，ブラームスとメトロノーム記号の改訂について合意していた。結局，全集では《ピアノソナタ》作品 11,《子供の情景》作品 15,《幻想曲》作品 17,《夜曲》作品 23,《森の情景》作品 82 のみ，ごくわずかに数値を変更しただけに過ぎず，大幅な改訂はされなかった（門馬 2003, 192)。「教育版」では，メトロノーム記号が「(旧) 全集」の数値から変更されているため，メトロノーム記号の再考が目的の一つとしてあったと考えられる。

シューマンが使用していたメトロノームには欠陥があり楽譜に記されていた数値は不正確であったという逸話はよく語られる。極端にテンポが速すぎると見なされるものがあり，ピアノ作品では特に《子供の情景》作品 15 が例として挙げられる。しかし，このメトロノームの欠陥の真偽に関しては諸説ある。このような話が広まったのは，クララとブラームスが「(旧) 全集」編集の際に，メトロノーム記号の改訂を計画していたことを知ったビューローがヨハン・バプティスト・クラーマー Johann Baptist Cramer (1771-1858) の練習曲《クラーマー＝ビューローの 60 の練習曲》の序文に，シューマンは故障していたメトロノームを使用していたと書いたことから始まる。さらに，シューマンの書簡集を初めて出版したグスターフ・ヤンセン Gustav Jansen (1831-1890) も著書の中で，シューマンの死後にメトロノームの故障は証明されたと発表した。そして，クララが「教育版」でメトロノーム記号を変更し，これらの事情が重なったことで，この逸話が信憑性の高いものとして広まったのである。現在の研究では，シューマンが記したメトロノーム記号は故障によるものではないとの見解が主流であり，ヘンレ社 (Henle) の Web サイトではシューマンのメトロノームの正確性を表明している[4]。また，ウィーン原典版の校訂をした音楽学者のヨアヒム・ドラハイム Joachim Draheim は，クララはブラームスの熱心な助言にも関わらず，「(旧) 全集」では全てのメトロノーム記号とペダル記号を削除し，「教育版」において初めてクララの考えに基づいてメトロノーム記号を記載していると述べている[5] (Draheim, Ed. Wiener Urtext Edition, 1996)。よって，クララの「教育版」のメトロノーム記号の改訂は，シューマンのメトロノーム記号の訂正としての意図ではなく，彼女の演奏解釈に基づく改訂として考える必要がある。

次に「教育版」の概要について述べたい。「教育版」というのは後世の通称であるが，実際のタイトルは『ロベルト・シューマンのピアノ作品 *Klavier-Werke von ROBERT SCHUMANN*』となっている。副題が付けられ「運指と演奏記号を付記した最初の教育的な版。手稿および個人的な継承に基づく *Erste mit Fingersatz und Vortragsbezeichnung versehene Instructive Ausgabe. Nach den Handschriften und persönlicher Ueberlieferung*」と記されている【図 1】。

「教育版」の収録曲は，シューマンの全ピアノソロ作品と《ペダル・ピアノのためのスケッチ》作品 56 と《ペダル・ピアノのための 6 つの練習曲》作品 60 を合わせた 38 曲である【表 1】。連弾作品，2 台ピアノの作品などは収録されていない。シューマンが 1850 年に改訂した作品については，No. 5 の《クララ・ヴィークの主題による即興曲集》，No. 6 の《ダヴィッド同盟舞曲集》のように a，b と


Klavier-Werke
von
ROBERT SCHUMANN.
Erste mit Fingersatz und Vortragsbezeichnung versehene Instructive Ausgabe.
Nach den Handschriften und persönlicher Ueberlieferung
herausgegeben von
CLARA SCHUMANN.
№1. Variationen über den Namen „Abegg" Op.1.
№2. Papillons. Op.2.
№3. Studien nach Capricen von Paganini bearbeitet. Op.3.
№4. Intermezzi. Op.4.
№5a. Impromptus über ein Thema von Clara Wieck. Op.5. Erste Ausgabe.
№5b. Impromptus über ein Thema von Clara Wieck. Op.5. Zweite Ausgabe.
№6a. Die Davidsbündler. 18 Charakterstücke. Op.6. Erste Ausgabe.
№6b. Die Davidsbündler. 18 Charakterstücke. Op.6. Zweite Ausgabe.
№7. Toccata. Op.7.
№8. Allegro. Op.8.
№9. Carnaval. Scènes mignonnes sur 4 Notes. Op.9.
№10. 6 Concert-Etuden nach Capricen von Paganini. Op.10.
№11. Große Sonate №1. Op.11.
№12. Phantasiestücke. Op.12.
№13. Symphonische Etuden. In Form von Variationen. Op.13.
№14. Große Sonate №3. Op.14.
№15. Kinderscenen. Op.15.
№16. Kreisleriana. Op.16.
№17. Phantasie. Op.17.
№18. Arabeske. Op.18.
№19. Blumenstück. Op.19.
№20. Humoreske. Op.20.
№21. Novelletten. Op.21.
№22. Sonate №2. Op.22.
№23. Nachtstücke. Op.23.
№24. Faschingsschwank aus Wien. Op.26.
№25. Drei Romanzen. Op.28.
№26. Scherzo, Gigue, Romanze und Fughette. Op.32.
№27. Studien für den Pedalflügel. 6 Stücke in kanonischer Form. Op.56.
№28. Skizzen für den Pedalflügel. Op.58.
№29. 43 Klavierstücke. Op.68.
№30. Vier Fugen. Op.72.
№31. Vier Märsche. Op.76.
№32. Waldscenen. 9 Klavierstücke. Op.82.
№33. Bunte Blätter. 14 Stücke. Op.99.
№34. Drei Phantasiestücke. Op.111.
№35. Drei Klavier-Sonaten für die Jugend. Op.118.
№36. Albumblätter. 20 Klavierstücke. Op.124.
№37. Sieben Klavierstücke in Fughettenform. Op.126.
№38. Gesänge der Frühe. 5 Stücke. Op.133.
ERSTE ABTHEILUNG.
BAND I–III №1–19.
Kritische und instructive Bearbeitung Eigenthum der Verleger.
LEIPZIG und BRÜSSEL,
BREITKOPF & HÄRTEL.

【図 1】「教育版」の表紙[6]

初版と改訂版を複数に分けて編集しているものや，No. 13 の《交響的練習曲》ように改訂版のタイトル「変奏曲形式の練習曲」も併記されて出版しているなど，作品によって版の扱いが異なっている。

クララの「教育版」は主に楽譜の表記方法，運指とペダル，メトロノーム記号の改訂と補足がされているが，どのように編集したのかを記した校訂報告はつけられていない。そのため，この「教育版」は印刷の誤りなどの訂正が必要となり，のちに改訂版（新版）が作られることになる。

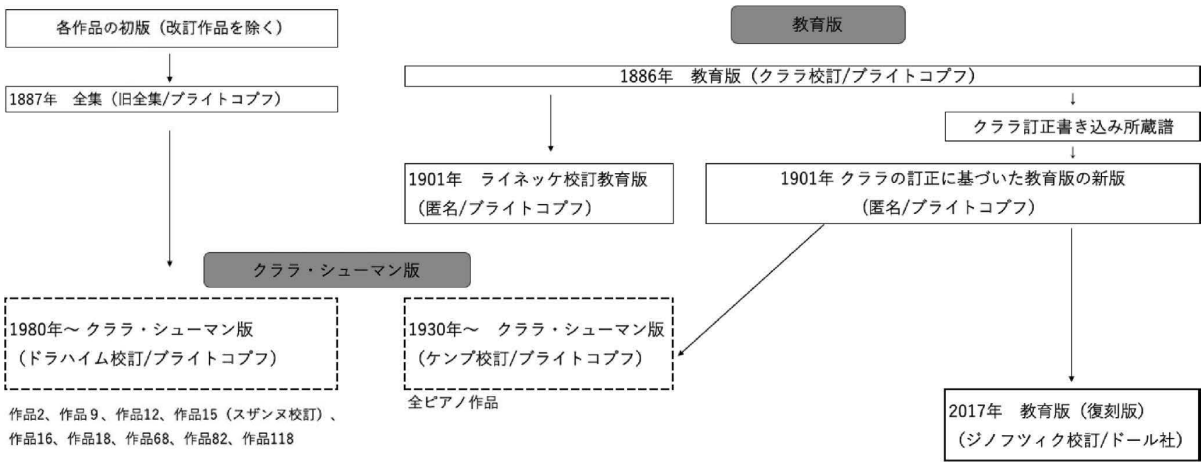
(3) 複数回にわたる「教育版」の改訂

1896 年にクララが亡くなった後，ブライトコプフ社はシューマン夫妻の友人であったカール・ライネッケ Carl Reinecke（1824-1896）にクララの「教育版」の改訂を依頼した。このライネッケによる版では，運指や演奏記号を改

【表 1】「教育版」の収録曲一覧表

収録曲			
No. 1	アベッグ変奏曲	No. 19	花の曲
No. 2	蝶々	No. 20	フモレスケ
No. 3	パガニーニのカプリッチョによる 6 つの練習曲集　第 1 集	No. 21	ノヴェレッテン
No. 4	インテルメッゾ	No. 22	ピアノ・ソナタ第 2 番
No. 5a	クララ・ヴィークの主題による 10 の即興曲（初版）	No. 23	夜曲
No. 5b	クララ・ヴィークの主題による 10 の即興曲（改訂版）	No. 24	ウィーンの謝肉祭の道化
No. 6a	ダヴィッド同盟舞曲集（初版）	No. 25	3 つのロマンス
No. 6b	ダヴィッド同盟舞曲集（改訂版）	No. 26	4 つの小品
No. 7	トッカータ	No. 27	ペダル・ピアノのための 6 つの練習曲
No. 8	アレグロ	No. 28	ペダル・ピアノのためのスケッチ
No. 9	謝肉祭	No. 29	ユーゲントアルバム
No. 10	パガニーニのカプリッチョによる 6 つの練習曲集　第 2 集	No. 30	4 つのフーガ
No. 11	ピアノ・ソナタ第 1 番	No. 31	4 つの行進曲
No. 12	幻想小曲集	No. 32	森の情景
No. 13	交響的練習曲（変奏曲形式の練習曲）	No. 33	いろとりどりの小品
No. 14	ピアノ・ソナタ第 3 番	No. 34	3 つの幻想曲集
No. 15	子供の情景	No. 35	子供のための 3 つのソナタ
No. 16	クライスレリアーナ	No. 36	アルバムブレッター
No. 17	幻想曲	No. 37	7 つのフゲッタ形式によるピアノ曲
No. 18	アラベスク	No. 38	暁の歌

訂していたがクララの「教育版」と同じタイトルを使用したまま出版されていた。また，匿名で出版され改訂箇所についても言及していない版となっている。クララの娘マリー・シューマン Marie Schumann（1841-1929）は，ライネッケの改訂はクララが承諾していない内容が含まれていることを指摘し，出版社と法的な争いにまで発展した。すでに市場に出ていたライネッケの「教育版」は 1901 年に回収され，さらに同年 1901 年には，クララ所蔵の 1886 年「教育版」に記されたクララの訂正書き込みが反映された「教育版」の新版が出版されている。つまり，1901 年にはライネッケによる匿名の「教育版」，クララの「教育版」に追記された訂正に基づく新版が出版されている【図 2】。



【図 2】　クララ・シューマン版の出版系譜

(4) 2 つの「クララ・シューマン版」―クララ＝ケンプ校訂版とクララ＝ドラハイム校訂版

「教育版」の新版は 1930 年にヴィルヘルム・ケンプによって再び改訂され，それは現在ブライトコプフ社から『ロベルト・シューマンピアノ作品集』として全 7 巻にまとめられている。表紙には「クララ・シューマン版」と併記され，内表紙にケンプの名前が表記されている。「クララ＝ケンプ校訂版」の成立については Evers, 2018 による序文を概観すると以下のようになる（Ed. Breitkopf & Härtel 2018）。

ブライトコプフ社がケンプに求めたのは，誤りを訂正し，特に必要と思われる奏法記号を付け加えることであった。当時としては最新とは思われない不完全な指使いや楽譜の正書法（手の割り当てに問題がある箇所を修正する）に出版社は改訂の必要性を感じていた。当初ケンプはクララの権威を侵害しないことを優先して改訂依頼を断っているが，その後に依頼を承諾している。ケンプは自筆譜との比較を求めていたが，全ての自筆譜を参照することが叶わなかったため「今世紀（20 世紀）のピアニストの要求に応えられる版」の作成を進めた（Ed. Breitkopf & Härtel 2018, IV, V）。また，ケンプは「教育版」の新版に基づいてクララの運指やペダリングを改訂しているが，クララの編集方法と同様に参照した資料や介入箇所を説明する批判報告を付けていない（Ed. Dohr 2018: I）。両版の相違として挙げられるのは，主に運指とペダリングである。Evers はケンプ校訂版では現代のピアニストが必要とする内容を補足することに重点が置かれたため，現代の演奏方法に近いものになっており，より読みやすくなっている版であると述べている（Ed. Breitkopf & Härtel 2018, V）。

さらに，1980 年代には新たに別の版が「クララ・シューマン版」という名目でブライトコプフ社から出版された。この「クララ・シューマン版」は，音楽学者のドラハイムとスザンヌ・ホイ・ドラ

ハイム Susanne Hoy-Draheim によって，「(旧) 全集」に基づいて改訂されたものである[7]。以上のように，現在「クララ・シューマン版」と呼ばれている楽譜は複数にわたる改訂を経ているが，クララの「教育版」をもとに編集されたものと，「(旧) 全集)」をもとに編集されたものとに分かれるにも関わらず，それらは不分明のまま「クララ・シューマン版」という用語が受容されてきた。それでは，クララによって編集された「教育版」はどのようなものであっただろうか。

2. 復刻版「教育版」の分析—《アベッグ変奏曲》作品 1 を例に

シューマンの作品を最も演奏し，楽譜編集したクララがどのように演奏していたのかを紐解くため，近年，クララが編集した「教育版」を復刻させ，その姿を世に示そうとする動きがシューマン研究の最前線の音楽学者によって成され始めている。全 3 巻にまとめられた「教育版」のオリジナル版は，現在ツヴィッカウのロベルト・シューマン・ハウスに保管され，長年再販されなかった。しかし，2017 年からロベルト・シューマン・ハウス所長のトーマス・ジノフツィク Thomas Synofzik 監修によってドール社から復刻版が出版され始めた。ジノフツィクが監修したこの復刻版は作品概要と小節番号が補足されたファクシミリ版であり，現在（2022 年 2 月）までに作品 1 から作品 5 までが販売され，今後【表 1】の収録曲が順次販売される予定である。次節では，初めて入手可能となった復刻版の内容を考察する。

復刻版「教育版」の内容を考察するために，本節では最初の作品番号が付けられた《アベッグ変奏曲》作品 1 を対象に考察する。この作品は 1831 年にキストナー社（Kistner）から初版刷が出版された直後に，作曲者本人によって一部が変更された改訂刷が 3 つ存在している。本稿では改訂箇所について詳しく扱わないが，主に変更点は，一部音の変更と作品番号が明記されていることが挙げられる[8]。

復刻版では，初版（1831 年），改訂刷，クララの「教育版」初版（1886 年：クララ所蔵譜，訂正書き込み付き），ライネッケ校訂（匿名）「教育版」（1901 年），クララの訂正書き込みを反映した「教育版」の新版（1901 年：マリー・シューマン所蔵譜）の 5 冊を典拠にそれぞれの変更点を校訂報告に記載し，クララの手書きの指示を反映している。楽譜そのものは 1901 年「教育版（新版）」の複製版となっている背景を考えると，1886 年の「教育版」初版には誤植が多いことから，ジノフツィクは 1901 年の「教育版（新版）」を価値の高い資料として採用していると推測できる。

先述したように「(旧) 全集」は基本的に個々の「初版」を印刷底本としているが，《アベッグ変奏曲》作品 1 の「(旧) 全集」では改訂刷を印刷底本としている。本節では各版を比較するために①初版（1831 年初版刷），②(旧) 全集，③復刻版「教育版」，④クララ＝ケンプ校訂版を使用する。それぞれの版で改訂されたのは，大きく分けてメトロノーム記号の変更，ペダル記号と運指の追加である[9]。

(1) メトロノーム記号

各版のメトロノーム記号をみると A（「初版」と「(旧) 全集」）と B（「教育版」と「クララ＝ケンプ校訂版」）に分かれる【表 2】。「(旧) 全集」は「初版」を，「クララ＝ケンプ校訂版」は「教育版」のメトロノーム記号を踏襲していることが分かる。この A と B の関係性は運指とペダルについても同様である。

シューマンが①「初版」に記したメトロノーム数値は，それぞれの変奏曲で微量ながら変化しているが，クララが編集した③「教育版」では，「主題」から「変奏曲 3」まで全て ♩＝104 に設定されている。両者のテンポで特に違いがあるのが「変奏曲 3」と「カンタービレ」である。

【表 2】 各版のメトロノーム記号

	A		B	
版の種類	①初版	②(旧)全集	③教育版	④クララ・シューマン版（ケンプ校訂）
出版年	1831 年	1887 年	1886 年	1930 年
編集者	シューマン	クララ／ブラームス	クララ	ケンプ
主題	♩＝108	♩＝108	♩＝104	♩＝104
変奏曲 1	(♩＝104)	(♩＝104)	(♩＝104)	♩＝104
変奏曲 2	(♩＝112)	(♩＝112)	(♩＝104)	♩＝104
変奏曲 3	(♩＝ 80)	(♩＝ 80)	(♩＝104)	♩＝104
カンタービレ	♪＝126	♪＝126	(♩.＝ 96)	♩.　＝ 96
フィナーレ	♩.＝ 80	♩.＝ 80	(♩.＝ 96)	♩.　＝ 96

初版を踏襲　　教育版を踏襲

①「初版」のメトロノーム記号は「変奏曲 3」が♩＝80,「カンタービレ」が♪＝126（♩.に換算すると 42）であるのに対して，③「教育版」の「変奏曲 3」では♩＝106,「カンタービレ」が♩.＝96 となっている。つまり，この 2 曲に関しては，クララのテンポはシューマンの指示よりも速く指定されていることになる。特に「カンタービレ」のテンポ設定は，演奏者の解釈の違いが最も感じられる箇所である。シューマンの「カンタービレ」のテンポは,「変奏曲 3」とは全く異なる世界観で抒情的に旋律を歌わせながら演奏することができ，クララの「カンタービレ」のテンポは 8 分の 9 拍子を 3 拍子として捉えられる速さである。クララの場合,「主題」から「カンタービレ」まで 3 拍子の統一性を感じ,「カンタービレ」と「フィナーレ」も同じ数値のため，楽曲全体において，ある一定のテンポを保ち続けて演奏するという解釈になる。一方，シューマンは，各変奏曲のテンポが少しずつ変化し，一旦別世界に踏みこんだような「カンタービレ」を挿入して，最後の「フィナーレ」で再び音楽が動き出すという流れを汲み取ることができる。このように「教育版」でメトロノーム数値が変更されたことは特筆すべき点である。

(2) ペダル記号と運指の追加

原則,「初版」の運指とペダリングは部分的な指示に留まっており「(旧) 全集」はそれに準じている。クララはペダル記号と ritenuto の意味について,「教育版」の脚注に次のような原則を書いている。

> ペダルは Ped. で示され，常に開始音までもしくは開始音がない場合は次の記号まで Ped. がついています。ほとんどの場合リテヌートは，- - - で続けられていない時には，記されている小節を指します。(Ed. Synofzik 2017)

「教育版」では大幅に運指とペダルの追加がされ,「クララ＝ケンプ校訂版」ではクララの内容を踏襲しながら，運指やペダリングをより現代的なものへと変更している。前提として「初版（1831 年)」,

「教育版（1886 年）」,「クララ＝ケンプ校訂版（1930 年）」で作曲者や編集者が使用していたピアノはそれぞれ異なるため，楽器の変遷を考慮しなければならないが，分析ではあくまでも現代のピアノでこれらの楽譜を演奏した際に演奏効果がどのように異なるかを考察する。以下，特に注目すべき改訂箇所について抜粋し，譜例とともに解説する。尚，譜例解説の際「(旧）全集」は「初版」,「クララ＝ケンプ版」は「教育版」を踏襲し同様であるため，改訂箇所がある楽譜を中心に掲載する[10]。

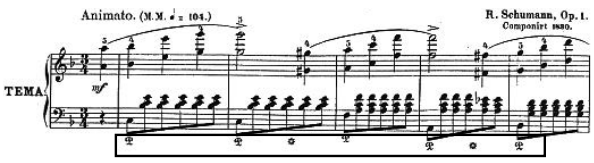
主題：「初版」と「(旧）全集」の変更点はないが,「教育版」と「クララ＝ケンプ校訂版」に注目すると，冒頭 A-B-E-G-G のテーマの運指とペダリングが異なっている（譜例 1)。「教育版」の場合，テーマは 5-4-5-4-5 の運指だが,「クララ＝ケンプ校訂版」では 2 拍目の E 音が 5 から 4 への指替えとなっている。ケンプの運指の場合，より 2 拍目から 3 拍目へ向かう E-G 音への移動が滑らかに進みやすく，オクターブであるため自然なスラーで外声部を弾くことができるだろう。またペダルを見てみると,「教育版」では 2 小節目の 1 拍目に踏み直されるが「クララ＝ケンプ校訂版」では 2 小節目の 2 拍目まで引き伸ばされている。クララのペダリングは 1 拍目のベース音が重視されているが，ケンプは 1 ～ 2 小節は同音（C 音）のベースのため，右手のフレーズを意識したペダリングとなっている。この「主題」では，A-B-E-G-G の旋律が反復する構成となっており，クララは全てにペダル記号を書いているのに対して，ケンプは反復時のペダル記号を省略している。

譜例 1 《アベッグ変奏曲》作品 1　第 1～5 小節

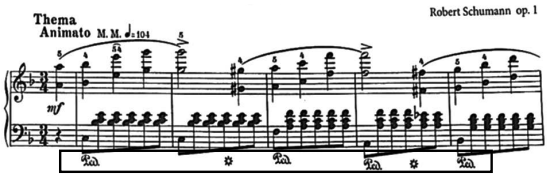
初版

(旧）全集

教育版



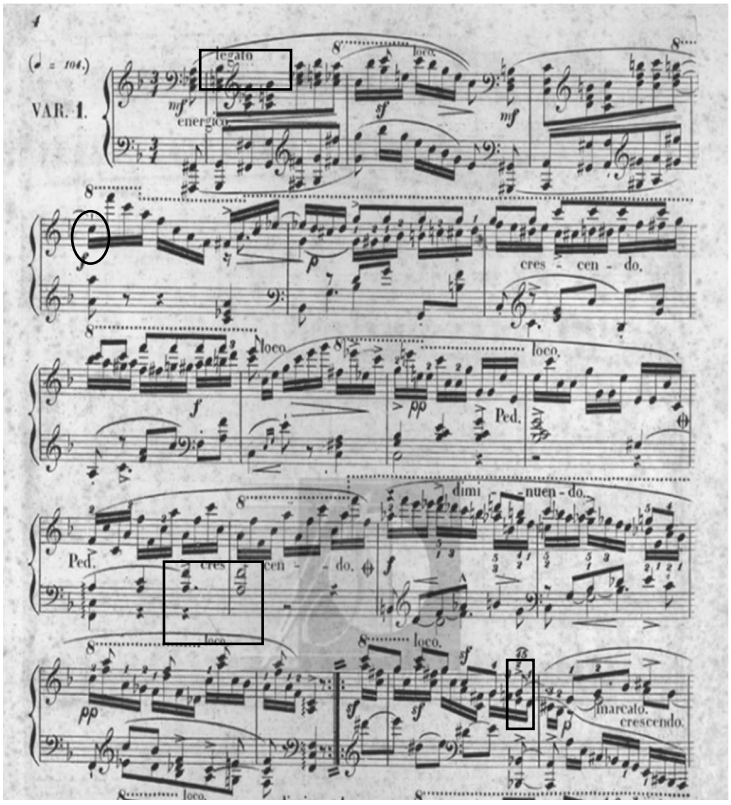
クララ＝ケンプ校訂版



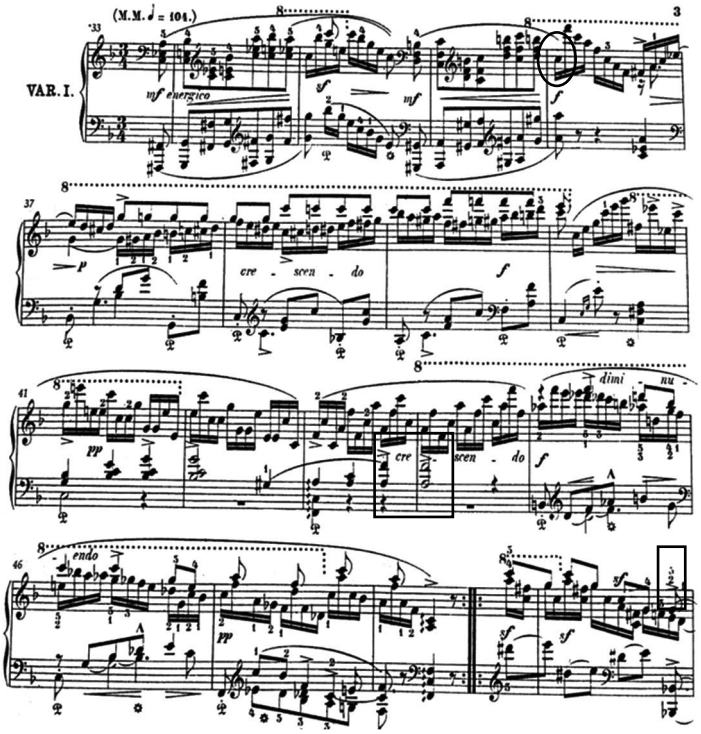
変奏曲 1：この楽曲では,「初版」と「(旧）全集」に書かれていた 1 小節目の legato が「教育版」と「クララ＝ケンプ校訂版」で削除されている（譜例 2)。

譜例 2《アベッグ変奏曲》作品 1

初版（キストナー社）33～50 小節



教育版　　33～49 小節　Legato・スタッカートの削除，アクセントの追加，運指の変更

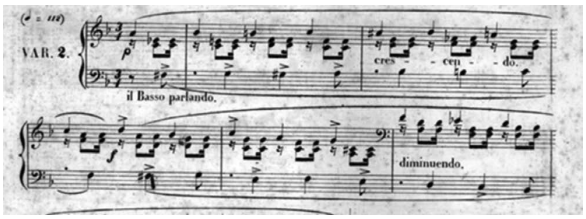


ジノフツィクの報告では，legato の意味は冒頭のアウフタクト裏から 1 拍目に上行する和音へのスラーと同義であるとの見解を示している。その見解を踏まえると，2 小節単位のフレーズの中に細かいスラーを感じて弾くことができるだろう。「教育版」では運指の追記がされ，「クララ＝ケンプ校訂版」ではさらに細かく運指の追記や変更がされている。この変奏曲には半音階を伴う内声部や連打のパッセージが登場するため，詳細な運指の追記が必要となったと考えられる。また，「教育版」のみに見られる特徴としては，36 小節 1 拍目 16 分音符の C 音のスタッカートである。クララの手書きの訂正でスタッカートが削除されたため「教育版」にはスタッカートがついていない。また，「初版」と「(旧) 全集」の 44 小節左手 A–F の二和音にはアクセントが書かれていないが，「教育版」ではアクセントが付けられている。41 小節に出現する左手の主題にはアクセントが付けられているため，「初版」の校正ミスの可能性が高い。後半の 49 小節 3 拍目の 16 分音符 E 音と G 音の二和音は，「初版」では 4–5 の指替えになっているが，このパッセージに求められるテクニックを考慮すると指替えの必要性は全くない。「教育版」では指替えはなくなり，よりアクセントの表現がし易い効率的な運指に変更されている。また，「初版」ではペダル記号が最小限に書かれているが，「教育版」では *sf* や *f*，左手のスタッカートやアクセントが記されている箇所にペダルが追加されている。

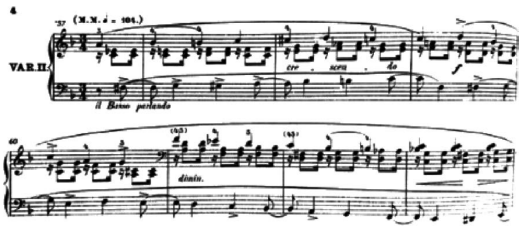
変奏曲 2：この変奏曲ではシンコペーションで左手の旋律が進んでいくが，「教育版」から記譜方法が変更された。また「教育版」で指番号は追記されたが，ペダルの追記については最後の小節のみとなっている。

譜例 3《アベッグ変奏曲》作品 1　第 57～63 小節

初版



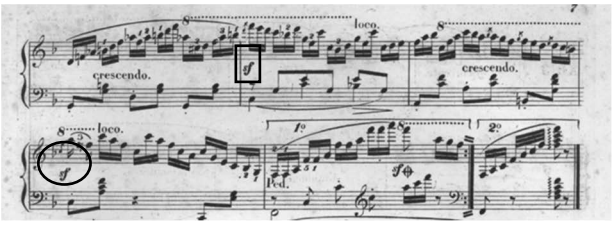
教育版



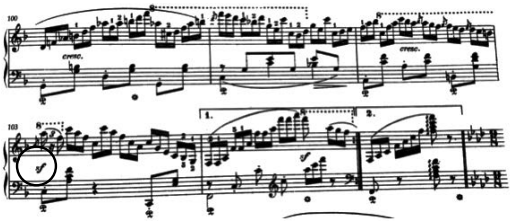
変奏曲 3：「初版」と「(旧) 全集」には 101 小節の 1 拍目に *sf* があるが，「教育版」と「クララ＝ケンプ校訂版」では削除されている[11]。103 小節の *sf* は残されているのを見ると，見落としではなくクララが意図的に *sf* を削除した可能性も考えられる（譜例 4）。右手の三連符で流れる旋律とは対照的に，97～100 小節，102～103 小節の左手はスタッカートを伴って跳躍している。101 小節だけ左手はスラーを伴った滑らかな伴奏形となるため，*sf* を削除することであえて柔らかな音色でフレーズ感を捉え直して弾くということも可能である。*sf* をつけた場合，99 小節から曲の終盤まで一気に流れを止めることなく大きなフレーズを感じて弾くことができることができるだろう。

譜例 4《アベッグ変奏曲》作品 1　第 100～105 小節

初版



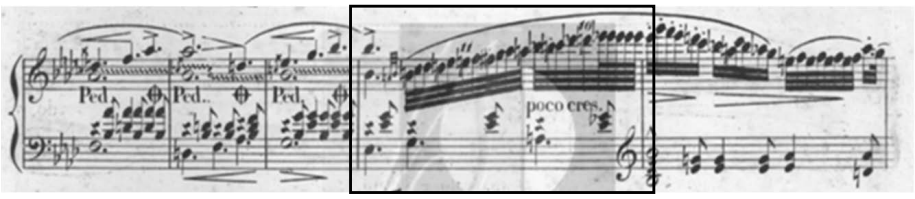
教育版



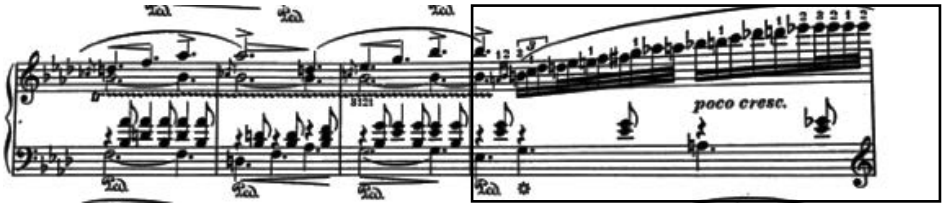
カンタービレ：この挿入句は 112 小節の右手のパッセージの譜割りが「初版・（旧）全集」,「教育版」,「クララ＝ケンプ校訂版」で異なっている（譜例 5）。「初版・（旧）全集」では 11 連符と 10 連符となっているが,「教育版」では前打音の後に続く H-C-Des 音の 3 つが 16 分音符，D 音からの半音階が 32 分音符となっている。「クララ＝ケンプ校訂版」では H-C-Des 音を 3 連符と補足し，運指が細かく追記されている。この 112 小節の半音階の上行形のパッセージはリズムをどのように捉えるかによって演奏者の解釈が分かれるところでもある。「初版・（旧）全集」のように前打音を含めて半音階のパッセージとして弾くか,「教育版」,「クララ＝ケンプ校訂版」のように 3 連符を感じさせるようにゆったりと入り一気に駆け上るように半音階を弾くという解釈も考えられる。

譜例 5《アベッグ変奏曲》作品 1　第 109～113 小節

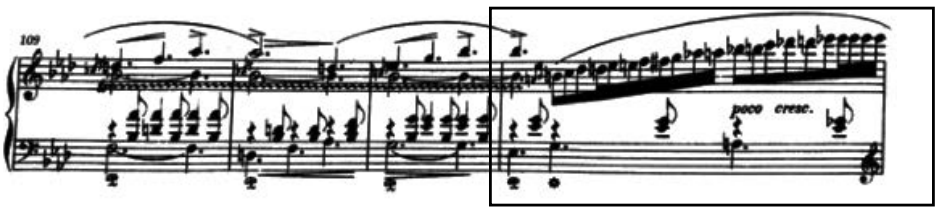
初版　　11 連符と 10 連符



クララ＝ケンプ校訂版　　3 連符と運指の追加



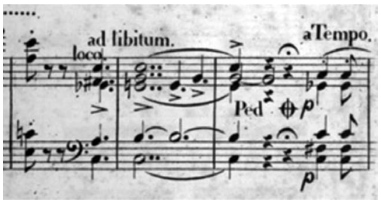
教育版　　16 分音符＋32 分音符



フィナーレ：先述したように，シューマンは初版刷と改訂刷で一部を改訂している。「初版」の196～197小節は左手から右手の内声にかけてはっきりとA-B-E-G-Gの主題がアクセントをつけて配置されている（譜例6-①）。しかし，改訂刷で主題のA-B音は右手に配置されG音はタイに変更された（譜例6-②）。

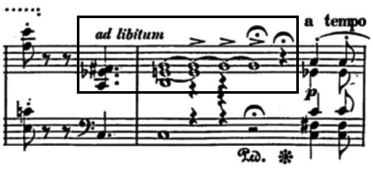
譜例6《アベッグ変奏曲》作品1　第196～198小節

①初版



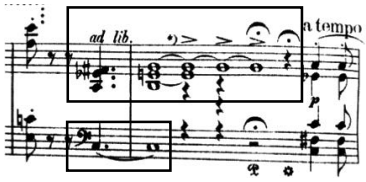
②（旧）全集

タイの追加



③教育版

左手C音　タイの追加



タイになったことで幻想的に主題が回想され，西原は「改訂刷では明らかに「聴こえない音楽」という美学が意図されており，シューマンの創作意思の変化が見られる」と述べ（西原 2013, 104），前田は「消されていく音にアクセントをつけることで主題音を暗示する」と述べている（Mayeda 1992, 480-486）。この実音化されない主題について，「教育版」では以下のようにクララの注記がある。

> 持続された音にアクセントをつけることで意図された効果は，ピアノではほとんど実現できません。しかし，これは響き豊かなタッチで鳴らし，その音価に応じて音を持続させる指示を演奏者に与えている。（Ed. Synofzik 2017）

このような手法は《蝶々》作品2でも登場し，のちに《フモレスケ》作品20に現れる「内なる声 innere Stimme」の概念へと繋がっていくのである[12]。また，「（旧）全集」の左手C音にタイはつけられていないが，「教育版」と「クララ＝ケンプ校訂版」にはタイがつけられている（譜例6-③）。タイの有無は197小節からの音響効果に大きく影響してくるだろう。

以上が，「教育版」の特徴的な改訂箇所である。基本的に「クララ＝ケンプ校訂版」はクララのペダリングを踏襲しており，部分的に運指が効率的なものに変更されている。メトロノーム記号については数値の変更がされているが，作品のイメージを大きく覆す改訂とはいえない。「カンタービレ」においては，演奏者の解釈が分かれるところである。クララはシューマンよりも速いテンポを設定しているが，音楽的に不自然な解釈と判断されるようなテンポではないため，演奏者は作品全体のテンポの流れをどのように持っていくかを考慮する必要がある。次に，この比較を踏まえて「教育版」の歴史と受容について整理し，クララの「教育版」の位置付けとその意義について検討する。

3. 「教育版」という用語

ピアノ奏者のための教育的な楽譜は，日本では「解釈版」や「実用版」と称されることが多い。これらが指し示すのは，影響力のあるピアニストや教育者が監修のもと，自筆譜や初版などの原典には

記されていない運指や強弱記号，フレージングなどの細かな奏法記号が付記されている楽譜―校訂者の解釈を反映した実用的な楽譜―というのが一般的な認識といえる。しかし，渡辺は「実用版」楽譜（本稿で言う「教育版」）は演奏家たちが自らの演奏解釈を書き込んだ楽譜であるという単純な言い方で片付けられるものではない」と述べ，これらの楽譜は「それぞれの時代ないしサークルの中で共有されていたこの曲の「作品像」であるということもできる」と「実用版」楽譜の一般的な認識とその実態とのずれについて言及している（渡辺 2000, 168-171）。

そもそも教育的な趣旨のもと作られた楽譜は，1837 年にペータース社（Peters）から出版されたカール・ツェルニー Carl Czerny（1791-1857）が校訂したバッハの鍵盤作品集から始まった。ツェルニーはテンポ，強弱記号，運指，フレージング，アーティキュレーションなどをかなり詳細に，かつ自由に書き込んでいる。偉大な教育者であったツェルニーが楽譜を校訂したということは，後続の教育者たちに大きな影響を与えた。1869 年になると，シュトゥットガルト音楽院の創設者であり音楽教育者のジグムント・レーベルト Sigmund Lebert（1821-1884）はハンス・フォン・ビューロー Hans von Bülow（1830-1894），イマヌエル・ファイスト Immanuel Faisst（1823-1894），イグナーツ・ラハナー Ignaz Lachner（1807-1895），フランツ・リスト Franz Liszt（1811-1886）と一緒にハイドン，モーツァルト，ベートーヴェンなどのピアノ作品を校訂した。それらは『古典的なピアノ作品の教育版 *Instruktiv Ausgabe Klassischer Klavierwerke*』のタイトルでコッタ社（J. G. Cotta）から出版された。「Instruktiv Ausgabe」という用語がはっきりと明記された楽譜が確立した（Ed. Synofzik, 2）。こうして音楽家がピアノ指導のために明確な版を作成することは，一定の習慣として定着していった。

「教育版」や「実用版」の仕様や趣旨は様々で，それらの違いは，時代の傾向によって異なっている。例えば，ピアニストのアルフレッド・コルトー Alfred Cortot（1877-1962）が校訂した「コルトー版」は，楽譜そのものにはあまり書き込みはされずに詳細な脚注によって解釈や練習方法を記している[13]。校訂者による強弱記号や奏法記号の追加や補足がされた楽譜は，特に 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて頻繁に出版されていた。19 世紀の演奏家たちは作品に自由な解釈を加えて演奏していたこともあり，演奏そのものに価値が生まれたことで自身の解釈を楽譜として形に残す動きは積極的に行われていたと考えられる。作曲した本人が演奏者を担っていた時代から 19 世紀に移行するにつれて，楽譜そのものの在り方に変化が生じたことが関係しているだろう。クララを筆頭に職業演奏家が登場し始め，作曲者と演奏者の分業化によって一般家庭にもピアノは浸透していった。そういった時代背景を含めて，ピアノ学習者に向けて教育的観点で編集された楽譜は需要があったに違いない。しかし，ツェルニー校訂のバッハの「教育版」のようにあまりにも大胆な解釈は今日の演奏者や教育者に敬遠されがちである。渡辺が指摘しているように「原典を恣意的に改竄した」楽譜として扱われてきた「教育版」や「実用版」は研究の分野ではまともな資料として長年扱われなかったということも頷ける（渡辺 2000, 171）。

このような校訂者の解釈が書き込まれた楽譜は 20 世紀初頭をピークに出版されていたが，次第に 19 世紀的な演奏―個人の表現主義的な演奏―を否定する動きが主流となる。演奏者の主観をできるだけ排除して楽譜を客観的な資料として忠実に演奏するべきだとする，演奏における新即物主義の思想が現れた。その結果，校訂者によって書き加えられたものを排除し，作曲家自身の一次資料に準じた「原典版」が出版され始める。そして，20 世紀以降の演奏家は作品を解釈することから，作品をいかにして実現するかに焦点を当て始め，原典主義的な思想のもと「作品（楽譜）に忠実」であるこ

とが共通認識として浸透していった。この時代の「教育版」は19世紀の「教育版」とは対照的に，原典と校訂者の解釈を明確に分けるなど原典主義に沿った「批判校訂版」として出版されることが多くなる。ハインリヒ・シェンカー Heinrich Schenker（1868–1935）のベートーヴェン・ソナタの校訂版などはその一例である。

現代では，原典主義の流れを受けながらも様々な形で「教育版」は国内外問わず出版され続けている。それらに多く共通するのは「原典」と「校訂者による解釈」の区別をはっきりさせた仕様で出版しているということである（渡辺 2000, 171）。また，出版される作品もバッハ，モーツァルト，ベートーヴェン，ショパン，ラヴェル，ドビュッシーなどピアノ奏者の定番レパートリーに挙げられる作品が出版されている傾向にあり，例えばバッハのインヴェンションでは，各声部が色分けされ主題の出現箇所にはマーキングがされているなど視覚的に音楽の構成が理解できるようになっているものなど，「教育版」の仕様には近年さまざまな工夫が見られる。そして教育的な側面だけではなく，このような楽譜は偉大な演奏家や教育者の解釈を考察できるため演奏研究の分野においても重要な資料として扱われるようになっている。

4. クララの「教育版」の意義

このような背景を含めて，クララの「教育版」の意義を考察したい。クララは，従来の「教育版」について批判的な言葉を残しており，それは1882年7月22日に出版社のライムント・ヘルテル Raymund Härtel（1810–1888）に宛てた手紙で明らかになっている。

> 私は決して，細部まで分析され手を加えられた既存の教育的な版に合わせるつもりはありません。それ自体，私にとって正しいとは思えませんが，少なくともシューマン［作品］においては認められるでしょう。シューマンの作品を演奏するときには，ある種の批評的，音楽的な基盤があることを前提としなければいけませんから。（Schumann Briefedition 2008, Serie III/9: 371）

クララは従来の「教育版」に批判的に捉えていたものの，シューマンの作品を理解してもらうためには自分が編集した「教育的な版」を出版する必要があると考えていたようである。1895年のフェルディナント・シューマン Ferdinand Schumann（1849–1891）の日記によると，クララはビューローが校訂したベートーヴェンのピアノソナタの「教育版」ついて以下のように酷評していた。

> ベートーヴェンが書き留めなかった演奏記号が，彼の版には含まれているのです。そんなインチキなものは学生から取り上げなくてはならない。このような出版物は，まともな音楽家にとっては，まったくもって無用です。（*NZfM* 1917, No. 84/11: 88）

この発言からも，校訂者が自由に解釈を書き加えたものを「教育版」として世に出す姿勢に対して，晩年まで変わらず批判的であったことがわかる。クララの改訂について Claudia は「彼女自身の演奏と教育の実践に基づいており，元の音楽テキストはほとんど手つかずのまま」（Claudia 1996, 285）と述べているように，少なくとも作品1については，ビューローらが出版していた「教育版」のような，作曲者が記していない奏法記号の追加などはほとんどされていないことが今回の分析で明らかになっ

た。副題に「個人的な継承による」と書かれてはいるものの，改訂内容はあくまでも運指の追加やペダリングの変更や補足であり，奏法に関する技術的側面での改訂である。

それにも関わらず，クララの楽譜編集については長年作品を恣意的に改訂していると非難されてきた。その歴史について Beich，Armin らは「それらの多くは，その後「教育版」を改訂したライネッケやケンプなどの編集者によるものだ」と述べている（Beich, Armin 2015, 497）。この指摘からも「教育版」が複数回にわたって改訂されたことによって，それぞれが誤った認識で広まっているという実情が見えてくる。副題に「個人的な継承」と銘打って販売されたが故に，シューマンの作品が恣意的に改訂されていると評価されてしまったのではないだろうか。新装版「クララ・シューマン版（クララ＝ケンプ校訂）」の序文には，クララの改訂について「ピアニスト・ピアノ教師としての長年の経験とシューマンとの議論の記憶に基づいている」と書かれ，「彼女は夫の作品に忠実であるという基本的な考えから逸脱しているとは思えない」とクララの作品への忠実性を指摘している（Ed. Breitkopf & Härtel 2018, IV–V）。

これまでクララの改訂については，特に《子供の情景》作品 15 での改訂が大々的に取り上げられ，その改訂内容について議論がされてきた。しかし，今回考察した《アベッグ変奏曲》作品 1 では，クララが作品像を改変したとされるような改訂はされていない。クララが編集した全ての作品が「個人的な継承」を引き継いだわけではなく，作品ごとによって改訂の程度に差があるということである。19 世紀に広まった「教育版」の存在に批判的な言葉を残しながら，自ら「教育版」を出版するというクララの矛盾した行為の背景には，従来の「教育版」とは一線を画した楽譜を世に出そうという強い意思が感じられる。その意味では，「教育版」は教育者・クララとしての新たな一面が現れている楽譜ともいえるだろう。

おわりに

今日の演奏者が音楽作品を演奏する際には「原典版」をメインに使用し，「教育版」や「実用版」などはサブアイテムとして参照していることが多い。それは，校訂者の作品への介入を排除し，資料研究のもと批判校訂された「原典版」に作品の本来の姿が反映されている可能性が一番高いと判断しているからである。しかし「教育版」の意義やクララの出版への態度を考慮すると，「教育版」は敬遠されるべき存在ではなく，シューマンの作品には複雑な編集歴と出版歴があるため演奏者が単純に「原典版」を選択することこそが問題だといえる。この復刻版が出版されたことで，現代の演奏者は新たな演奏解釈や作品像に想いを巡らすことが可能になり，19 世紀を代表する演奏家のピアニズムを垣間みることができるようになったのである。

今後の課題は，引き続き順次販売される復刻版の「教育版」の比較分析とクララの楽譜編集の再評価である。シューマンの作品を最も演奏してきたクララの解釈が反映されている版としてピアニストがどのように評価し扱うべきなのか，それぞれの作品においてクララの改訂箇所やその程度について引き続き検討することが必要である。

引用（参考）文献

Boetticher, Wolfgang. 1976. *Robert Schumanns Klavierwerke. Neue biographische und textkritische Untersuchungen. Teil I: Opus 1-6*. Wilhelmshaven.

Beiche, Michael, Armin, Koch and Ute, Scholz. 2015. “Die Editionen der Werke Robert. Schumanns.” in *Musikeditionen im Wandel der Geschichte*, edited by Reinmar Emans and Ulrich Krämer, Berlin; Boston: De Gruyter, 478–508.

Daverio, John. 1997. *Robert Schumann: Herald of a “New Poetic Age”*. New York: Oxford. University Press.

Jansen, Gustav. 1886. *Robert Schumann's Briefe. Neue Folge.* Leipzig: Breitkopf & Härtel, Repr. New South Wales: The Wentworth Press, 2018.

Mayeda, Akio. 1992. *Robert Schumanns Weg zur Symphonie*. Zürich. 480–486.

McCorkle, Margit, L. 2003. *Robert Schumann: Thematisch-Bibliographisches Werkverzeichnis. NeueAusgabe sämtlicher Werke. Serie VIII: Supplemente Band 6*. Mainz: Schott.

Roesner, Linda, Correll. 1990. “*Brahms's editions of Schumann*”, in *Brahms Studies. Analytical and Historical Perspectives*. Ed. George S. Bozarth. Oxford: Clarendon Press, 253–282.

Vries, Claudia de. 1996. “*Die Pianistin Clara Wieck-Schumann. Interpretation im Spannungsfeld von Tradition und Individualität*”. Schumann Forshungen Band 5, Mainz: Schott Music.

Walker, Alan. 1972. *Robert Schumann: The Man and His Music*. London: Barrie and. Jenkins.（邦訳：アラン・ウォーカー　1986 『シューマン』横溝亮一訳，東京：音楽之友社）

Neue Zeitschrift Für Musik. 1917. No. 84/11.（Internet Archive https://archive.org より閲覧）

Schumann Briefedition. 2008. Serie III/Bd. 9. Briefwechsel Clara Schumanns mit dem Verlag Breitkopf & Härtel 1856 bis 1895, hrsg. von Michael Heinemann, Köln: Dohr.

大澤里紗　2020 「ロベルト・シューマンの改訂ピアノ作品における版選択の問題―演奏の伝統と現代のピアニストに開かれた可能性―」国立音楽大学博士学位論文

西原　稔　2013 『シューマン　全ピアノ作品の研究　上』 東京：音楽之友社

原田光子　1970 『真実なる女性　クララ・シューマン』新版　東京：ダヴィッド社

諸石幸生　1992 『クラシック音楽の 20 世紀第三巻　演奏家の思想』 東京：音楽之友社

渡辺　裕　2001 『西洋音楽演奏史序説　ベートーヴェン　ピアノ・ソナタの演奏史研究』 東京：春秋社

楽譜

Schumann, Robert. 1831. THÉME sur le nom Abegg varié pour Le Pianoforte et d'di' á Mademoiselle Pauline Comtesse d'Abegg par Op. 1, Leipzig: F. Kistner.［Brahms-Institut Inv. Nr.: ABH 5.2.1 gewöhnliches Exemplar. Digitales Archiv―Brahms- Institut an der Musikhochschule Lübeck］（リューベック・ブラームス研究所所蔵：デジタルアーカイブより閲覧）

Schumann, Robert. 1887. *VARIATIONEN über den Namen Abegg. Op. 1.* in Robert Schumann's Werke, Serie VII: Für Pianoforte zu zwei Händen, No. 39. hrsg. von Clara Schumann. Leipzig: Breitkopf & Härtel.

Schumann, Robert. 1945. *VARIATIONS SUR LE NOM “ABEGG”op. 1,* ed. Alfred Cortot, Paris: Editions Salabert.（日本語版 1998 年『アルフレッド・コルトー版　シューマン・アベッグ変奏曲　Op. 1』八田　淳翻訳・校閲，東京：全音楽譜出版社）

Schumann, Robert. 2017. *Variationen über den Namen “Abegg” op. 1,* Instruktive Ausgabe von Clara Schumann, Reprint, kommentiert und hrsg. von Thomas Synofzik. Köln: Dohr.

Schumann, Robert. 2018. *Sämtliche Klavierwerke*（*Clara Schumann-Ausgabe*）*Band I.* hrsg. von Clara Schumann, revidiert und mit Fingersätzen versehen von Wilhelm Kempff, vorwort: Timo Evers, Leipzig: Breitkopf & Härtel.

註

1　本稿ではロベルト・シューマンを「シューマン」，クララ・シューマンを「クララ」と称する。

2　シューマンの「全集」には2つあり，ブライトコプフ社から出版された「旧全集」と1984年よりショット社（Schott）から出版されている「新全集」がある（『新シューマン全集 *Neue Ausgabe sämtlicher Werke*』）。本稿ではクララが編集した「全集」を「（旧）全集」と称する。

3　Instruktiv Ausgabe は「教育的な版，有益な版」と訳すことができる。これまでに日本語で確認したものは「校閲版」「有益版」「校訂版」などがあり，用語は確定していない。《子供の情景》ウィーン原典版日本語版（藤本一子訳）では「教育版」が使用されている。本稿では，クララが実践と教育に基づいて出版した版と考えたため「教育版」とした。

4　ヘンレ社 Web サイトの音楽コラム「Schumann Forum 2010」より “Schumann's Metronome Markings. A bother or a benefit?” by Wolf-Dieter Seiffert（2010年7月15日）を参照。 https://www.henle.de/jp/music-column/schumann-anniversary-2010/schumann-forum/schumanns-metronome-markings-a-bother-or-a-benefit/ （2021年9月閲覧）

5　Draheim, Joachim. 1996. Schumann Kinderszenen Op. 15. Joachim Draheim/Jozef De Beenhouwer. Wiener Urtext Edition. Vorwort. Hinweise zur Interpretation. Zu den Metronomzahlen.（日本語版　藤本一子訳 1998年音楽之友社）

6　この表紙は復刻版の校訂報告に掲載されていた表紙であるが，プレート番号が典拠資料と一致しないため，どの年代の教育版かは不明である。

7　現在，ブライトコプフ社で出版されているドラハイム校訂の楽譜は，作品2，9，12，15（スザンヌ校訂），16，18，68，82，118の9作品となっている。

8　初版刷では作品番号がつけられておらず，《蝶々》作品2の初版刷にも作品番号がつけられていなかったことから，この2曲に作品番号をつけることに慎重であったという見解がある（西原 2013, 104）詳しくは，Boetticher, 1976，Mayeda, 1992 を参照されたい。

9　「新シューマン全集」については，現時点（2022年2月）でまだ作品1が出版されていない。

10　©by Breitkopf ＆ Härtel, Wiesbaden Used by permission.

11　ジノフツィクの校訂報告には特に *sf* の削除について言及されていない。

12　《フモレスケ》作品20の第2曲は，3段譜の真ん中に「内なる声　*Innere Stimme*」と記された実際には弾かれることのない旋律が書かれている。

13　現在販売されている「コルトー版」のシューマン作品は，作品1，2，6，7，9，11，12，13，14，15，16，17，18，19，20，21，22，26がある。

（おおさわ　りさ　　初等教育学科）